

幣院も山之内和尚も榊原神官も選に洩れ、私の分隊と共に本隊残留ということとなった。今里は私のところへやって来て、「おかげさまで、自分も本隊に残りました」と言った。

伊東隊出発の前晩、中隊長以下全員が一室に集まり、壮行の宴を張った。酒がまわっていると、河端がツト立ちが上がり、藤村の△晩春の別離▽を新体詩調で唄い、続いて永瀬軍曹が李白の△金陵の酒肆にて留別す▽と題する次の詩を朗々と吟じた。

風は柳花を吹いて満店香し

呉姫酒を庄して、客を喚んで嘗めしむ

金陵の子弟、来って相い送り

行かんと欲して行かず、各觴を尽くす

請う君、試みに問え東流の水に

別意と之と、誰が短かくまた長きかと

そして終幕には、

「明日はお発ちか、おなごりおしや、雨の十日も降ればよい、ダンチヨネ……」

が繰り返えされ、幕がようやく下りた。

その翌朝早々、伊東少尉は中隊の半数に近い人員を引き具して、トラックに分乗して出発した。トラックが動き出す

と、送る方も送られる方も、日の丸の旗をうち振った。そして、トラックはやがて朝靄の中に消えて行った。

中隊長は半減した人員の中から一箇分隊を屯營の警備衛兵として残留させ、残りの者を引き具して、討伐行動に専念した。丘を下って川を徒渉し、風に誘われた柳花の舞い散る谷合いを縫って、村から村を巡り歩いた。そのように足を棒にして歩き続けた小林隊は、幸か不幸か敵との出合いが悪かった。下士官以下兵隊たちはこの徒勞を残念がり、他部隊が武功を立てている情報を耳にしては、武運の拙なさを託っていた。しかし、部下の兵隊たちが生まれた頃、大正初年のシベリヤ出兵に、すでに従軍していたという老中隊長の表情には、先陣を争うようなケチな気配は少しも見られず、従容たる態度で、いつも変わらず歩き続けていた。

そんな討伐行動中のある日、南石曹子の山腹で大休止をとり、又銃して、タバコをプカプカやりながら昼飯にかかった時、遠くの方で機関銃が鳴っているような気がした。はじめのうちは、耳を疑い、次には、友軍の演習だろうぐらいに、たかをくくって、のんびりかまえてみると、中隊長は、「あれはチェコの音だ」

という。そのうちに、ピューンピューンと身辺に弾が落下し

と号令を下し、いち早く斜面を下って行く。われわれを狙い

撃って来る敵の機銃掃射はますます激しさをましてくる。身近の岩に当たってピュン、ブルーンと音を立てて宙を飛ぶ跳弾は、砂塵をあげて足元の土中にプツリとさざり込む弾よりも気味がわるい。われわれは崖をすべり落ちるようになり、中隊長のあとを追った。

丘を下りきったところに見通しのいい川原があり、その向う側に立ち枯れの高叢畑がある。いつの間にか川を涉りきって、思わず知らず、われわれはその畑の中に逃げ込んでいた。敵の銃撃はいよいよ激しさを増し、鉄飯をたたくような軽快な発射音が至近距離のように思われる。正確に畑を狙い撃って来る敵弾が、高叢殻を貫ぬき通るので、撃たれている当方は、着弾の十倍もの効果をヒシヒシと感じる。いまや、討伐するやつが位置転倒して、討伐されている姿となった。みんな自づと敵の凹みに身を伏せて、寸土に命を托しているかたちである。高叢殻が勇ましく羽搏いている。

生き死にの賽の河原の舞楽かな

中隊長は独り畑の外に立って、双眼鏡をもって前方の敵情を観察しながら、大声で、

「お前たち、身体に震いが来ているだろう。ソレ、立って見ろ。それは武者振というもんだ」

などと、途方もないことを言い、やがて「突撃に移る。スグ

に白馬から荷を卸せ」と指揮班に命じ、柳の一枝を折って、その裸馬に打ち跨がり、ハッシと一鞭あてて、まっしぐらに敵陣めざして突進して行った。あとにつづくわれわれ武者は震える余裕もあらばこそ、懸命に中隊長の馬の後を追いかけた。そうして到達した敵の拠点には敵は居ず、いつしか四散してしまっていた。

これが小林隊の初陣の様相であるが、兵隊たちは撃たれればなしで、一弾の応酬もできず、泥んこ姿でその夜、屯營に辿りついた。中隊長は今日の南石曹子の戦闘について次のような講評をした。

「今日は生まれて始めて弾の洗礼を受けたものが大部分であろう。お芽出とう。敵の機関銃はだいたいチェコスロバキヤ製である。友軍の九六式重機、十一年式軽機とは、聞いての通り発射音と発射速度がちがう。機能はどちらかと言うと、敵の方が勝っている。その聞きわけができるようになったことは、一つ経験を積んだことである。怪我をした者はなかったようだが、弾などそうたやすく当たるものではない。だが、一発当たる面積は、この小指の先で押しした寸法だから、五尺の我が身には受け答えの余地が充分にある。それから、白馬は雪の中では紛れるが、青葉の中では目標になる。今日は俺が標的の役目を買って出た。早飯という号令は歩兵操典にはないが、食事中止では食い残しの飯に心が残って本気の戦闘が出来まい。半端な昼飯だったが、昼食は早飯で、あれ

で完了した。これから夕飯をゆっくり食べるがいい。さて、今日の敵の機関銃は何挺だったと思うか。河端一等兵ノ」

「ハイ三挺と思います」

「いや、ただの一挺だった。終り」

兵隊たちは「泰山鳴動鼠一匹」の中隊長の警語に遇って、ただ、シュンとするばかりだった。班内では兵器の手入れをしながら、同僚たちが、

「なんぼなんでも、三挺は大き過ぎたぞ。過ぎたるは猶お及ばざるがごとし、とか……」

と、河端をたしなめた。

そうして夕食が終わると、兵隊たちは前後不覚で泥睡した。不寝番が巡って、剥いだ毛布をかけて廻るのだが、週番下士が折々そのあとを見まわる。地獄と極楽と、あの世とこの世との区別をわきまえぬ死屍累々。それが発する高野の合奏の中で、ランプを引き寄せ、独り神妙に手紙を認めている者がいる。その男は来翰筆頭受領者の河端大袈裟居士である。彼は週番下士勤務の私を見て、

「帰營そうその勤務ご苦労だなあ。ときに吉田、山の彼方の空遠く幸住むと人の言う」という句は、ボードレールだっけ、か」

と問いかける。私が、

「一挺の万年筆で三挺分の効率を發揮しよう、ついに文豪のボードレールまで引張り出しおったな」

とからかうと、彼の言うには、

「討伐が続くと、全く手紙の整理に骨が折れちまう。これ、こんなに溜っちゃった」

「そうかい。色男はつらいなあ」

「いや、それほどでもない」

そんなことを言っていて、彼はタバコに火をつけて、さかんに考へこんでいる。私が、

「その句はカール・ブッセだと思うが、文学は明日にして、早く寝ろよ。明朝また出動かも知れんぞ」

と注意を促すと、河端は心残りの万年筆にキャップを着せ、ランプの火を細め、

「またも出ました三角野郎が、四角四面のやぐらの上で、音頭とるとは、おおそれながら……」

と囁くように八木節を唄いつつ、毛布にもぐり込み、独語のような句調で、

「底抜けバケツが十三銭、シツチョイ、シツチョイ、シツチョイナ……」

を繰り返しているうちに、いつかムニャムニャの念仏となり、ついにお陀仏になってしまふ。

こういう男のところには女手の封書が定期便のように毎日来る。それを八幸わせの便り」と兵隊たちは称んでいたが、来信を配りまわる当番の者が、それらしいと感ずくと、

「河端一等兵殿ノ東京都杉並区和泉町の春山鈴江さんから、

かかるか知れないぞ、ということ自分を言いきかせている意味があった。

「敵が三角野郎なら、お前たちはいったい、何野郎なんだい」

「さあね、泥牛野郎とでもいいですかね」

と兵隊たちは答える。私はその頃、次の七言絶句を作った。

寄老農夫（ろうのうふによす）

梢上の野鳥黎明を告ぐれば

樹下の泥牛は春眠を樂しむ

歳々雨を呼ぶ老農夫

今朝牛を叱して又田を耕やす

これはいつか折をみて、中隊長に贈呈するつもりであったが、中隊長は、「雨の日は味方より敵の方が難儀している」と言っていて、今朝も雨の中を部隊を引き連れて出て行った。

このたびは、われわれの分隊が残って、屯營の守備にあたった。表て門の土囊上に軽機を据え、裏の大本上の櫓には雨に濡れて展望哨が依然として立っている。ほか一名の動哨が三八式歩兵銃に実弾をこめて、土壁の外側を廻って警戒したこんなふうに残留となって、屯營で孤立しているよりは、中隊長と共にぬかるみを這いまわった方が、よほど安心がいける、と兵隊たちは思っていた。

部厚いのが一通。「次に、また同じく……」と、衆人の前で上書を声高らかに読み上げ、封書を窓の明りに透かして見る仕草をして、意地を焼いた上で手渡す。そんな習慣が自然にできていた。そういう仕打ちが暫く続くと、こんどは筆蹟は女手のままで、塩原大助、馬垣平九郎、石川五右衛門および武蔵坊弁慶などが差し出し人となってやって来るようになる。そうなる、配達員も負けて居らぬ。

「源の九郎判官義経殿へ、加賀の国安宅の関で立ち往生の、武蔵坊弁慶殿より、勸進帳一帖ノ」などと読み上げる。

そんな日が続いているうちに、南満に本格の雨季がやって来た。鉛色の雲が丘の裾にまで低く垂れて、時に早い両脚がしぶきをあげて大地をたたき、地を溶かした黄色い泥水が奔流となって道に溢れた。部隊はその泥濘をついて、索敵行動に目を重ねていた。

満鉄本線と安奉線の沿線には、関東軍の独立守備隊がいてこれが敵を掃討すると、敵部隊は安奉線と鴨緑江に挟まれた、いわゆる三角地帯に逃げ込んで来る。その敵に殴り込みをかけるのがわれわれの任務だった。八木節は埼玉出の兵隊たちの秘蔵芸で、彼等はこの三角地帯に入り込んで来る敵部隊を△三角野郎の名で呼んでいた。それ出動ノ」となる。この三角野郎がまず頭にひらめくのだ。河端が聞き覚えた八木節を唄いながら寝つくのは、出没する三角野郎への腹いせの気分が多分にあり、夜陰をついて、いつ非常呼集がか

何日も出たままで本隊が帰らず、夜に入って、「展望哨報告ノ前方の山腹に懐中電燈よりの信号の火が点滅しています。まだ続いています。まだ……まだ、いま消えました。報告終り」

などとくると、衛兵司令の私は、仮眠兵から病人までタタキ起して、応戦の準備にかかる。だが、そんなことがたび重なって、幾日も衛兵勤務を続けていると、しまいには慣れっこになって、孤立感が薄れて、自然に安らいだ気分が生まれて来るものである。

衛兵所の隣の部屋が、医務室となっていた。その部屋との隔壁には小障子のはめ込まれていて、衛兵所の方は敵の襲撃を慮って、明りを控え目にしてあるのに、隣室のランプは皎々と点っていて、障子がひときり明るかった。そこには、過日来病臥中の原山一等兵が収容されていた。その狭い室に、昨夜発病した河端が枕を並べた。原山は血便の具合いから、アミーバー赤痢ではないかと診断されていた。同じ症状と見られる河端は、熱にうなされ、嘔をいい、時に呻き、時に唸った。衰弱しきった原山の方は寝返りもできず、木乃伊のように痩せ細り、呼吸も絶え絶えであった。

原山の排便は出尽して枯れてしまったが、河端の尻からは唸るたびごとに、多量の血便が出た。長雨のため安東からの軍用道路が決潰して、陸軍病院からの軍医の来着が遅れていたため、交代で看護にあたる素人の兵隊たちは、襦袢の取り

替えに専念し、いたずらに頭を冷し、空しくクレオソート丸を服用させるばかりであった。

ゴーツという風に乗って、強い雨が泥の家に横なぐりに降りかかる。それが遠のくと、すこし間をおいて別の方向から来襲して来る。集中豪雨の往復ビンタを食って、泥の家が溶けて流れてしまいそうである。衛門から中庭に吹き抜ける雨風がランプの火を揺るがせ、病室との間の障子が明暗に瞬く。雨のにじみが壁を浸して障子まで垂れて来た。唐の顔魯公が「屋漏痕」と称した模様が、鬼の面のように拡大して行き、その有名な墨蹟「裴將軍」の軍の縦画が、鬼の脚のように、ニョキニョキと垂れ下って来た。

雨水の壁に這う夜の鬼の影

深夜に交代を了えて戻って来たズブぬれの今里に、

「豪雨の天体に異変はなかったかい。お前、こんどは仮眠の番だろう。すぐ寝ろよ」というと、彼は、

「ハイ、病人をチョット見て来ます」

と行って出て行った。やがて病室から戻って来た彼は、腰の手拭で消毒水の手を拭き、石炭酸の臭気を嗅ぎながら、

「原山は臨終がせままっているようであります。河端さんは、春山鈴江さんの手紙を胸に抱いて七転八倒しています。それあのように……。気の毒ですが手のつけようがありません。

上等兵殿、これ、こんなに寒ぶ疣が出てきました」

と言って、今里は自分の左腕をまくって、その皮膚を私に見せるのだった。その時、彼の二の腕に、ハートにSの字の刺青が見られた。私が、

「そのハートSというのは何のマークだい」

と訊くと、

「ハイ、実は、いろの名前の頭文字なんです……」

と彼は採み手で答えた。

「その人からの幸わせの便りは来ているのかい」

と重ねて訊くと、

「死んじまいますね、鈴枝という名前でした。河端さんの彼女とよく似た名前ですが、江と枝がちがいます」

という。そして、

「河端さんが抱いて唸っている手紙を見せつけられ、思わず昔の女のことか思い出されて、こんなに寒ぶ疣が……」

と言って、こんどは首のあたりをランプの光に向けて私に見せるのだった。

「そうすると、鈴枝さんと寒ぶ疣とは何かの関係があるんだな」

と念を押すと、

「それがあるんです。大いにあるんです」

と、深く回想するような顔付きで、

「聞いてくれますか、不思議な話を」

と前置きして、彼は寝もやらず、次のような話を綿々と語るのだった。その話は――

自分は小学校を卒えてから去年の兵隊検査まで、ずっと柳橋台地の花屋で奉公していた。検査に甲種合格となり、いちおう、年期は明けたが、翌年一月の入営までお札奉公のつもりで勤めを続けていた。そのうちにお盆が来て、蝦夷菊の盛りとなった。毎年の例にならって、石神井の農家に依託栽培させてある畑に、花の刈り取りに出かけた。主人と一緒に荷車を挽いて行ったが、そこに着いた頃から雨が降り出したので、花の刈り取りを明日に延ばして、主人は帰って行ってしまった。

蝦夷菊の花の赤と白が入りまじって咲いている畑の向う隅に、昼でも板戸を締めきった古い二階家があった。それをわれわれはいつも無断で常宿にしていた。その軒下に行んで、しばらく雨に濡れる蝦夷菊の花を眺めていたが、所在ないので、板戸をコチ開けて二階へ上った。二階には、押入れと三尺床のついた六畳の部屋に、三畳の小間が続いていて、両間は障子で仕切られていた。床の間には、黄檗即非の款のある「南無阿弥陀仏」の名号軸が、いつものように下げられている。毎年見つけていたこの軸は、今年は殊のほか寄る年波を思わせ、しみのようなものがところどころにあらわれている。

夜になって弁当を使い、押し入れから黴臭い布団を出して

敷き、ゴロンと横になった。蚊がブンブン来るので、押入れを探して見ると、蚊取り線香ならぬ壇用の線香の箱が出て来た。その線香の巻束に火をつけ、目障りになる五燭の裸電気を消して、早目に寝ついてしまった。

話がここまで来ると、今里は悪寒におそれたように身震いし、中休みに深い呼吸をして、唾を呑み下した。その時、隣の病室から河端の呻き声が、また聞こえはじめた。

「上等兵殿、丑三つというのは、たしか、夜の二時頃だそうですね」

と今里は呻き声を聞き捨てにして、私に念を押し、そして話を続ける。

その丑三つの頃、胸を圧えつけられる寝苦しさに、フト目が醒めると、明りのない筈の隣の部屋がポーツと明るく、灯明のような揺らぐ火が点っているのが障子越しに見られる。障子がゆらぐ火影を受けて、明暗の呼吸づかいをしているようだった。ジッと息を殺して隣り部屋の様子を窺っていると、やがて、ウーウーという呻き声が聞こえはじめた。それはたしかに女のうめきである。恐る恐る、その声に聞き耳を立てていると、静かに起き上った人影が、ポーツと腰高障子に映る。その影絵は丸鬚に結った女の首であった。

「それはパーマネットの洋髪じゃなかったベエカ」

と同僚の黒沢が茶化すと、彼はキツとなって、

「半畳は入れるなよ。思い出すだけで、……寒ぶ疣が……」

といて、疲れた、というふうには額の汗を拭き、黙ってしま

う。私が、

「まあ、一本つけるよ」

と、ルビーティーンの缶を差出して気嫌をとると、彼は手を横に振って辞退し、

「おんな印など、今は見るのもいやです。それよりはお茶を一杯」

と言って、黒沢を促し、茶をすすりながら、「これからがホントに怖いんだ」と、自分に言い聞かせたあと、鼻をかみ、口のあたりをこすり、居すまいを正してから、次のように話を進めるのだった。

身をすくめて、呼吸をこらしてその影を見ていると、スーッと障子がひとりでに開き、横を向いた女がそこに坐っている。自分は思わず、誰だ！と叫んだ。すると、その女は横向きのまま、身動き一つせず、

「よく来て下さいました。わたしは柳橋の鈴枝です。この家の縁の下に埋められています。どうか助けて下さい」と言う。自分は、

「それじゃ、鈴枝さんの鈴ちゃんだな！」

と問いかけると、

「ハイ、そうです」

と判っきりと答え、そのとたんに明りが消えて、女の姿も消え失せてしまった。

今里は、ヤレヤレという表情でスピヤー（満州烟業公司製造のタバコ）に火をつけ、

「ほんとにその時は、髪の毛が総立つのを覚えました。その鈴枝のSがこれなんです」

と、もういちど、二の腕を示してから、

「この話の続きは、のろけ話と探偵話になります。のろけ話は只じゃ申し訳けないし、それかといって、探偵話じゃお気に召さないでしょう。だが、いずれこの続きを話させて下さるとう。」

この△蝦夷菊灯心▽とも題すべき怪談に聞き入って、私も膚に粟が生じていた。

「それで、掘って見たかい」

と念を押すと、彼の話はこうだった。
翌日、下の押し入れの床を剥がして縁の下を掘って見ると髪形は夕べの通りの丸鬚の女の腐爛死体が出てきた。鈴枝の左頬にあった黒子が、顔面が爛れているので、しっかりと確認できなかったが、血の飛び散ったらしい銘仙の緋の柄は、たしかに見覚えのあるものだった。警察も調べの結果、鈴枝と断定した。

「だから自分には、幸わせの便りや、幸わせの慰問袋などという洒落たものは一つも来ませんでござんす」と、彼は下町弁で淋しそうな笑いを見せた。

雨がやんで夜が白みはじめ、山鳩が啼き、小鳥が囀りはじめた。すると、表で門歩哨が

「部隊が帰って来ました。やって来ます」

と叫び、やがて、歩調とれッ！の号令で、放浪の疲れも見せず、泥牛部隊が何日ぶりに衛門に進入して来た。

(つづく)

題字△東京部隊▽は昭和四十八年、笹森順造氏米寿の書。同氏は元青山学院長。青森県選出国會議員。長年政界におられて、国務大臣などに就任せられ、終戦後の日米関係の難局面に立ち、国事に尽瘁された。哲学博士、小野派一刀流の家元、日本におけるキリスト教の元老として重きをなしておられる。その著には△一刀流極意▽、△開戦経釈義▽などがある。